

“地域型老人アパート”の食堂について

正会員 ○ 在塚礼子*1

同 内藤 香*2

老人福祉施設の地域化と複合化に関する研究(5)

1. 研究目的

本研究は、老人のための居住環境を、すまいとサービスの体系として捉えて整備していくべきであるとの視点に基づき、老人福祉施設の地域化と複合化のあり方を考察し、アパートとサービスセンターの複合施設である“地域型老人アパート”の提案をおこなってきた*1。本報では、そこに、地域に開放された食堂を複合化することの意味について、利用状況を通して考察することを目的としている。

2. 研究方法

“地域型老人アパート”の最初の実例として位置づけられる世田谷区高齢者センター新樹苑をとりあげる。入居者を対象とする調査(A)と、地域の食堂利用者を対象とする調査(B)をもとに、①食堂利用者の属性 ②食堂利用の頻度/経緯 ③複合施設の利用や行事参加の状況 ④施設利用と交流などを分析し、食堂利用者層と利用形態を明らかにして、開かれた食堂を複合することの意味について考察する。

3. 結果(1)——入居者の食堂利用

① 日常の食事については、ほとんど食堂である人が半数近いが、昼食の利用者は極めて少ない。昼食は極く簡単に済ますという人が多いことに加え、地域住民との共用を避けたいとする人もいる。

② ほとんど食堂を利用しない人が3割近いが、身体機能が低下すると、複合した食堂の利用さえも避ける傾向が見られ、外出パターン限定・不活発グループでの利用率が低い。

*1 老人福祉施設の地域化と複合化に関する研究(1)~(4)
建築学会大会梗概集 1969, 1970, 1983, 1987年

【表1】施設概要

設置主体	世田谷区
開設	1987年4月
対象者	70歳以上の単身者
居住棟	住戸数 40戸(20.55㎡)
高齢者センター	区社会福祉協議会運営 1400㎡ (食堂、大広間、集会室、図書館、浴室 生活相談室、機能回復訓練室、健康相談室)

【表2】調査(B)概要

調査日時	1993年9月25日(金)、26日(土)、28日(月) 昼食時 11:00~14:00
調査場所	高齢者センター新樹苑の食堂前
調査対象	食堂利用者(新樹苑入居者を除く)
調査方法	アンケート調査(一部面接で補足)
調査結果	記入者 のべ 145人 2日または3日間の利用重複者 15人 実人数 130人 回答率 80%(37人が忙しいなどと調査拒否)

注:調査(A)は次報参照

【表3】外出行動パターン別・食堂利用形態 単位:人

食堂利用 形態 * 外出行動 パターン	ほぼ毎食堂利用	その他	ほとんど	計
	朝夕のみ利用	朝のみ 昼のみ など	行かない ()は自分 でつくる	
限定型	2(2)	3	2(2)	7
不活発型	4(3)	3	1	8
活発・近隣型	3(1)	1	3	7
活発・広域型	7(5)	2	3(3)	12
計	16(11)	9	9(4)	34

* 次報 表2参照

【表4】利用者の属性と当日の利用形態

単位:人

	利用者の年齢構成											当日の同伴者					当日の交通手段			
	10代 以下	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	不明	計	なし	家族	友人	友人 家族	計	徒歩	自転車	電車 バス・車	計
A	0	0	0	1	2	15	7	1	0	0	26	10	0	15	1	26	11	3	12	26
B	11	5	9	6	6	14	9	2	3	3	64	32	10	10	5	57	35	13	9	57
C	3	15	8	8	14	5	1	1	2	2	58	21	2	39	0	62	32	16	14	62
計	14	20	17	15	22	34	17	4	5	5	130	63	12	64	6	145	78	32	35	145

Notes on Opened Dining Room of Community Housing for the Aged

5284

——A Study of Opening and Combining

Facilities for the Aged (5) —— ARIZUKA Reiko et al.

4. 結果(2) —利用者層と利用形態

① 調査当日の食堂利用者は、A：サークル活動のための来所者 B：食堂のみの利用者（自宅から）C：同（職場から）に大別できる。Aは広域からの高齢者層、Bは広い年齢層の近隣住民、Cは近隣からの若年層が多く、BCの利用頻度は極めて高い。

② 同伴者をみると、AとCには友人が多く、Bにはひとりで来た人が最多だが、若い親子づれや祖母と孫など、家族とともに利用する人が特徴である。

③ 交通手段としては、Aに広域利用を反映して交通機関の利用が多く、BとCには徒歩が多いが、自転車利用者も少なくない。

④ 現在の利用形態は、食堂のみ利用/食堂利用+行事参加/食堂利用+行事とサークル活動参加/食堂利用+サークル活動参加、に分類できる。ほぼ毎日の利用、および週1回のサークル活動との複合利用のほとんどは高齢者が占める。

⑤ ほぼ毎日食堂を利用している高齢者の中で特徴的なのは、食堂のみを利用するひとりぐらしの男性で、行事にも参加するのはほぼ女性に限られる。

⑥ 食堂利用を散歩の目的地として、外出を日課にする高齢者もみられる。

5. 結果(3) —施設複合の効果

① 多くの地域住民（職場からの利用者を除く）の現在の利用形態は、最初の利用目的から拡大している。食堂利用からの発展が多いが、隣接公園も住民の施設利用を促している。

② 知り合いができたと答えたのは41人、入居者と知り合いになったとの答も23人にのぼる。それらには職場からの利用者も含まれる。食堂は交流の場としての役割も果たしている。

6. 考察

この食堂は、多様な利用者層の多様なニーズに対応して、当初のねらいを上回るような活用がなされ、隣接公園も含めた複合化の効果もみられる。安くて質の良い食事とともに、親切な職員の存在が地域の高齢者の頻繁な利用を支えている様子もうかがえる。入居者の心身機能低下へのさらなる対応が課題であろう。

調査にご協力下さった新樹苑の職員の方々および入居者と利用者みなさまに深く感謝いたします。

〔表5〕 現在の利用形態と利用頻度（地域住民のみ）単位：人

利用形態	利用頻度	ほぼ毎日	週2~3	週1	月1以下	はじめて	計
食事		4(4)	7(1)	2(2)	9(3)	3(1)	25(11)
食事・行事		3(3)	4(1)	4(2)	3(1)	0	14(7)
食事・行事・サークル		0	7(5)	1(1)	1(1)	0	9(7)
食事・サークルA#1		1(1)	3(2)	3(3)	0	0	7(6)
食事・サークルB#1		0	0	9(8)	10(8)	0	19(16)
小計		8(8)	21(9)	19(16)	23(13)	3(1)	74(47)
職場からの利用者		10	24	4	12	5	56

*1 A：食事のみにもくる
B：食事はサークル時のみ
*2 ()は60代以上

〔表6〕 利用頻度の高い利用者の居住形態 単位：人

利用形態	居住形態	独居	夫婦住	子と同居	計
食事		▲▲▲○			4
食事・行事		●○○	○○	●●	7
食事・行事・サークル		△○	○	○○	5
食事・サークルA		○	▲▲		3
計		10	5	4	19

〔△▲-男性
○●-女性
黒-ほぼ毎日
白-週に2~3回

〔表7〕 利用形態の拡大 単位：人

#1 現在の利用形態	最初の利用	隣接公園	食事	行事	サークル	サ行事・サークル	計
食事		0	76	1	1	0	78(53)
食事・行事		3	7	2	3	0	15(1)
食事・行事・サークル		1	2	1	3	2	98(0)
食事・サークル		0	2	0	26	0	28(2)
計		4	88	3	34	2	130(56)

#1 それぞれに友人に会いに、図書館、公園利用、健康相談を含む。
#2 ()は職場からの利用者

〔表8〕 知り合いができた人（当日利用形態別） 単位：人

当日利用形態	きっかけ						相手（複数回答）			
	食事	行事	サークル	*施設内	公園	不明	計	入居者	異世代	同世代
A	3	2	13	1	0	2	15	9	5	12
B	11	5	4	2	3	0	18	10	7	11
C	7	0	1	0	1	0	8	4	4	4
計	21	7	18	3	4	2	41	23	16	27

* ロビー、図書館、健康相談室

*1：埼玉大学助教授（工博）*2：埼玉大学卒業生